

羊は日本人には余りなじみのない動物かと思うが、聖書の世界では創世記4章にアベルは羊を飼うものとありますように、古くから羊との関係がある。歴史的にも紀元前7000年も前から羊を家畜化していたといわれる。ゆえに聖書の中にも日常的に羊が登場するわけである。

その羊は非常に弱々しい動物である。視力が弱くて、群れから少し離れるとすぐに迷子になってしまう。狼が現れたら、戦う角もないのですぐに襲われてしまう。ある意味、人間と似ていると言ってもいいのかもしれない。人間も一人では生きていけない。誰かの助けが必要であり、成長も出来ない。ただ若い時は、一人で大きくなったと思いがちである。若者は、時に生意気だったりする。いや、私もそうであった。子どもは中々影で支えている存在に気づかず、生意気なことを言ったりする。怒られていても、何故怒っているのか分からず反抗したりする。ある程度大きくなって親のおかげと思うようになり、回りの様々な人の助けによって成長できていると思うようになるもの。

羊の群れ同士の間もそれがあるかと思う。親羊の存在、周りの存在をだんだんと感じていくものであろう。そして羊は、次元の違う羊飼いの存在にも意識し、信頼関係を築いていくのかと思う。勿論、羊飼いが羊のためにどれほど尽くしているのか…ということは十分に知ることはないであろうが、しかしそれでも信頼関係は築かれているということが大事である。そこで、では人間は神の存在にどれだけ意識を持っているだろうか？聖書は、神への気づきをひたすら記しているのである。

そして11節に「わたしは良い羊飼いである。良い羊飼いは羊のために命を捨てる」と記す。どこに羊飼いが、羊のために命を捨てる…ということがあろうか？これは、あり得ないことである。人間が羊のために命を捨てるなんていうことはあり得ない。そのことと同じように、いや、それ以上に、神は人のために十字架にかかれて、命を差し出したのである。神が人のために、命を差し出す…それはあり得ないことではないか？しかしそれが聖書のメッセージであり、神の愛のかたちである。あなたはそれを信じるか？(神谷)